

団長の心のものさし

対話する音楽

演奏の概念を
変える！

作曲家のイメージがストレートに伝わる

9日夜、四日市市の第一楽器ミュージケで、井谷佳代フォルテピアノコンサートが開かれた。これは日本調律師協会中部支部が調律の日(4月4日)を記念して開いたもの。仕掛け人はうたおにの町田さん。

会場は補助椅子を並べるほどの盛況ぶり。井谷さんご自身による楽器解説に始まりハイドン、ベートーヴェン、モーツァルトの名曲が演奏された。井谷さんとうたおには、2008年にフォーレの演奏会で共演させていただいた。その時にはチェンバロを弾いていただいたので、フォルテピアノを聴くのは、2006年11月の県立美術館でのコンサート以来となる。

フォルテピアノは現在のピアノの前身であるが、モダンピアノで聴く

機会の多い作品たちが、まったく趣の異なった作品として聴こえる。おそらくベートーヴェンは作曲当時、この音色で作品をイメージしてメロ



仕掛け人、町田さんと

ディやハーモニーを生み出していたのだろう。モダンピアノの音に慣れ親しんだ私たちにとって、この音の世界はDNAを刺激する、古き良き時代の香りがする、特別な音の世界を展開してくれる。もちろん、たとえば

若い世代にはある種の“物足りなさ”を感じてしまうだろうほどに奥ゆかしい。だからといって主張がないわけでは決してない。



作曲家がイメージしていた音がある

うたおにの4月8日(木)の様子

練習内容

「コタンの歌」より

船漕ぎ歌

マリモの歌

熊の坐歌

アツシの歌

ムックリの歌

臼搗き歌

「Zigeunerlieder」より

Heiligem Eide

Gute Nacht!

予想通り欠席者が目立った。「コタンの歌」を中心に進めている現在だけど、ちょっとお遊びで「ジブシーの歌」から僕の大好きな2曲を歌った。やっぱりいい曲だ！傑作だ！こういう作品をしっかりと聴かせることの出来る合唱団になりたいなあ。

まるで大声で叫ぶ絶叫ではなく、トツツと語る語り部の台詞のようだ。嫌でも聴かされる音ではなく、聴き手が聴こうとしなければ伝わらない、まるで演奏者と聴衆が対話しているかのようだ。こういう音の世界に出会うと、現代の押し売りの音楽が息苦しく感じるほどだ。こういう世界こそ、もっと多くの人々に体験してもらいたい。とくに演奏家にはその表現上、多くの重要な要素を含んでいるからだ。今回の仕掛け人、町田さんには本当に感謝だ。

「音楽は人なり」だ

井谷さんご本人もフォルテピアノのような方だ。その容姿や振る舞いから感じる清楚な雰囲気の中に、実に“男気”を感じさせる強さが見えるからだ。深い存在感とも言える。その魅力が音楽そのものに見事に映し出されている。彼女自身がまるでフォルテピアノの生まれ変わりのように。



左から星合智美さん、高瀬瑛子先生、井谷佳代さん、そして僕。音楽の話で盛り上がりました。公演終了後、打ち上げにて。

この出会いは音楽づくりに
いい影響を与えるだろう

2年前のフォーレ演奏会の後、井谷さんとはぜひまた一緒にいたいと意気投合した。実は今回のこのコンサートに便乗する形で、うたおにとしての演奏企画を目論んだが、断念した。近い将来、きっと具体的なプロジェクトが立ち上がるだろう。

私たち演奏者は、あらゆるものから刺激を受け、逆に与え続けなければいけない。そしてそれが社会にいい影響を浸透させ、初めて文化になることを忘れてはならない。